

## 古フリジア語における語根音節の germ. a

下寄 正利

古フリジア語では、語根音節の germ. a の後に鼻音、更にその後に無声摩擦音が続くと、a+鼻音が *ō* になる。(かつこ内は意味を現代ドイツ語で示したもの。以下同様。)

*ōther* (ander), *brōchte* (brachte)

鼻音の後に無声摩擦音が続いていない場合には、germ. a は *o* に変化する。

*hona* (Hahn), *hond* (Hand), *long* (lang)

これらの変化を受けなかった語根音節の germ. a は、一部 *a* として現れるが、それ以外は *e* として現れる。

*dei* (Tag), *erm* (Arm; arm), *feder* (Vater), *smel* (schmal, klein), *stef* (Stab), *thek* (Dach), *weter* (Wasser)

同様の音変化は、古英語でも見られ、語根音節の germ. a の後に鼻音、更にその後に無声摩擦音が続くと、a+鼻音が *ō* になる<sup>1</sup>。

*ōþer* (ander), *brōhte* (brachte)

鼻音の後に無声摩擦音が続いていない場合には、語根音節の germ. a は *a* と *o* の中間音となる<sup>2</sup>。この音を表記するには *a* と *o* の両方が用いられている。

*hana/hona* (Hahn), *hand/hond* (Hand), *lang/long* (lang)

これらの変化を受けなかった語根音節の germ. a は、前舌化し *æ* になる<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 古ザクセン語では、語根音節の germ. a の後に鼻音、更にその後に無声摩擦音が続くと、a+鼻音は *ā* もしくは *ō* になる (*ōdar* もしくは *ādar* (ander), *brāhta* (brachte))。Gallée (<sup>3</sup>1993: 43-44)を参照のこと。

<sup>2</sup> 古ザクセン語でもこの音環境で germ. a > o という音変化が見られることがあるが、まれである。Gallée (<sup>3</sup>1993: 45-46)及び Nielsen (1985: 128)を参照のこと。

<sup>3</sup> 古ザクセン語では、語根音節の germ. a の e への変化は、rK (K=子音)の前等でまれに見られる程度である。Gallée (<sup>3</sup>1993: 44-45)を参照のこと。

dæg (Tag), fæder (Vater), smæl (schmal, klein), stæf (Stab), þæc (Dach), wæter (Wasser)

古英語では、これらの変化の後、更なる変化が起こり、この æ は、h(K), rK, lK の直前にあると、ea に変化する<sup>4</sup>。

eahta (acht), eax (Achse), earm (Arm; arm), sweart (schwarz), feallan (fallen), sealt (Salz)

直後に h(K), rK, lK が続いていないために ea にならず保持された æ は、次音節の母音が非前舌母音でこの母音に j が先行していない時、後に再び a に引き戻される<sup>5</sup>。そのため、次のような例では、語形変化系列内で æ と a の交替が見られる。

	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	dæg	dagas	Nom.	stæf	stafas
Gen.	dægēs	daga	Gen.	stæfes	stafa
Dat.	dæge	dagum	Dat.	stæfe	stafum
Akk.	dæg	dagas	Akk.	stæf	stafas

	Sg.	Pl.
Nom.	þæc	þacu
Gen.	þæces	þaca
Dat.	þæce	þacum
Akk.	þæc	þacu

古フリジア語においては、語根音節の germ. a は一部 a として現れると述べたが、それは次の音環境においてである。

<sup>4</sup> lK の前でこの変化が起こるのは、西サクソン方言とケント方言のみである。また、llj の前では、すべての方言でこの変化は起こらない(\*haljo > \*hallju > \*hællju > hell (Hölle))。æ は ð, g, sc の直後にある時も ea に変化するが、この変化は、h(K), rK, lK の直前でのもよりも後の時代に起こったものである。

<sup>5</sup> この a が、germ. a が次音節の非前舌母音の影響で æ になるのを阻害されそのまま残ったものではなく、germ. a が一旦 æ になった後に次音節の非前舌母音の影響で引き戻されたものであることについては、Campbell (2003 [1968]: 61)及び Ringe and Taylor (2014: 189-190)を参照のこと。

- 1) (-)warK という音連続において (swart (schwarz), warm (warm))
- 2) h(K)の前で (nacht (Nacht), wax (Wachs), slā (schlagen) < \*slahan)
- 3) IKの前で (ald (alt), salt (Salz))
- 4) was (war)のようなアクセントの無い語形で

これが germ. a が e になった後に再び a に引き戻されたためか、germ. a が e になるのが阻害されたためかは不明である。

この他、次音節の母音が j に先行されていない非前舌母音の時も、germ. a は a として現れたものと考えられる<sup>6</sup>。次のような諸形は、上にあげた音環境のどれにも当てはまらず、そのように仮定してのみ説明可能である。

garda (Familienbesitz), maga (Magen), skatha (Schaden), fara (gehen, fahren), makia (machen), wakia (wachen)

これに対し Bremmer Jr. (2009: 29-30)は、異なった見解を示しており、

Short *a* was fronted (or raised) to <*e*> /æ/ in both closed and open syllables, also when followed by a back vowel.

とした上で、上記の4つの音環境に加え、鼻音の前での germ. a > o を germ. a が前舌化しなかったケースとしてあげた後、次のように述べている。

In Old English, *æ* (the result of fronting) was retracted when followed by a back vowel, e. g. *stæf* ‘staff’ ~ *stafas* (PL). The absence of retraction from *æ* > *a* in Old Frisian is different from Old English. Compare OFries *slā* ‘to strike’ (Gmc \**slahan*) and OE *slēan* (< \**slæhan*), OFries *drega* ‘to carry’ (< \**dragan*) and OE *dragan*.

確かに、次のような例では、germ. a > e が非前舌母音の前にも表れている。

	Sg.	Pl.	Sg.	Pl.
Nom.	dei	degar	Nom. stef	stevār
Gen.	deis	degana	Gen. steves	steva
Dat.	dei	degum	Dat. steve	stevum
Akk.	dei	degar	Akk. stef	stevār

<sup>6</sup> Nielsen (1985: 129)は、古英語と同様、古フリジア語でも germ. a が一旦前舌母音化した後に、次音節の母音が非前舌母音の時、a への引き戻しが起こったとしている。Ringe (2014: 198-199)は、その可能性が高いとはしつつも、証明はできないとしている。

	Sg.	Pl.
Nom.	thek	theke
Gen.	thekes	theka
Dat.	theke	thekum
Akk.	thek	theke

しかしながら、もし次音節の非前舌母音の影響により germ. a が a として現れたと仮定しないとすると、上記の garda 等の例はどのように説明できるのだろうか。

これについては Bremmer Jr. 自身も全く認識が無いわけではなく、古フリジア語では w が先行している場合を除き、rK の前でも germ. a が e に前舌化するとした後、次のように述べている(Bremmer Jr. (2009: 29))。

Problematic, however, are unfronted forms such as *garda* ‘landed Property’, *flarde* ‘(individual) lang’.

しかしながら、garda や flarde における a がどこから来ているのか説明は試みられておらず、rK の前以外で問題となる a については言及さえされていない。

古フリジア語で、次音節の母音が j に先行されていない非前舌母音の時、語根音節で germ. a が a として現れたとした場合、a と e がこの仮定に反した分布を示している例が問題となってくるが、これは語形変化系列内での平均化ということで容易に説明できる。上であげた dei や stef や thek のような例では、すべての変化形で e が現れるが、これは元々音環境により a と e が交替していたものが平均化により e に統一された結果である。

	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	*dei	*dagar	⇒	Nom. dei	degar
Gen.	*deis	*daga		Gen. deis	dega
Dat.	*dei	*dagum		Dat. dei	degum
Akk.	*dei	*dagar		Akk. dei	degar
	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	*stef	*stavar	⇒	Nom. stef	stavar
Gen.	*steves	*stava		Gen. steves	steva
Dat.	*steve	*stavum		Dat. steve	stevum
Akk.	*stef	*stavar		Akk. stef	stavar

	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	*thek	*theke	⇒	thek	theke
Gen.	*thekes	*thaka		thekes	theka
Dat.	*theke	*thakum		theke	thekum
Akk.	*thek	*theke		thek	theke

klage (Klage, Anklage)<sup>7</sup>や flarde のような例では、すべての変化形で a が現れるが、これは a と e の交替が逆に a の方で統一されたためである。

	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	*klege	*klaga	⇒	klage	klaga
Gen.	*klege	*klaga		klage	klaga
Dat.	*klege	*klagum		klage	klagum
Akk.	*klege	*klaga		klage	klaga

語形変化系列内での平均化は、古英語でも起こっている。たとえば、ō 語幹名詞では、普通 a と æ の交替は見られず、母音が a の方に統一されている<sup>8</sup>。

	Sg.	Pl.		Sg.	Pl.
Nom.	*talu (Erzählung)	*tala	⇒	talū	tala
Gen.	*tæle	*tala		tale	tala
Dat.	*tæle	*talum		tale	talum
Akk.	*tæle	*tala		tale	tala

弱変化動詞第 2 種では、語幹の後に常に非前舌母音が続く（あるいは続いていた）ため、語幹が 1 音節で、i-ウムラウトを引き起こす要素も無いならば、本来語根音節の germ. a は a として現れるはずだが、sekia (beschuldigen) のような例では e が現れている。しかしながらこれも、名詞や強変化動詞などの母音が入り込んだものと説明可能であり、次音節の非前舌母音の前で語根音節の germ. a が a として現れたことを否定する材料にはならない。

<sup>7</sup> klage の場合は、弱変化動詞の klagia に対する類推も働いているかもしれない。

<sup>8</sup> 語尾が -e, -ena の時、æ が現れる例もある。Campbell (2003 [1968]: 235) を参照のこと。形容詞の語形変化系列においても平均化が見られ、a と æ の交替が æ の方で統一されている語がある。また a と æ の交替が残っている形容詞においても、e で始まる語尾の前では a が現れる。Campbell (2003 [1968]: 264) を参照のこと。強変化動詞第 6 種については、以下を参照のこと。

seke (Streitsache), seka (kämpfen)



\*sakia → sekia

古フリジア語の強変化動詞第6種には、現在語幹において語根音節の母音が a のみに統一されたものと、すべて e に統一された形と直説法 2・3 人称単数形以外 a に統一された形が併存しているものがあるが<sup>9</sup>、母音が e で統一された形について Bremmer Jr. (2009: 76)は、直説法 2・3 人称単数形の i-ウムラウトによる e が平均化により広まり形成されたものと見なしている<sup>10</sup>。しかしながら、waxa (wachsen)及び語幹が-alK-という形の強変化動詞第7種は語根音節の germ. a が a として現れる音環境を有しているが、これらの動詞では、直説法 2・3 人称単数形の e は現在語幹を持つ他の形態には広がっていない。第6種において現在語幹の語根音節の母音が e で統一された形は、アングロ・フリジア的な e が平均化により一般化したものと考えべきである。

強変化動詞第6種で現在語幹の語根音節の母音が直説法 2・3 人称単数形以外 a で統一されている動詞あるいは動詞の別形は、直説法 1 人称単数形、命令法単数形、接続法でのみ母音が e から a になったとは考えられないことから、かつては直説法 2・3 人称単数形も含め、現在語幹を持つすべての形態で a が現れていたものと考えられる。直説法 2・3 人称単数形の e は、後に起こった i-ウムラウトによるものである。直説法 2・3 人称単数形で a を伴った例もあるが、これは古い a が保持されたのではなく、i-ウムラウトが起こった後の平均化によるものである。fara の直説法現在 3 人称単数形を例にこの発展を示すと、次のようになる。

\*ferit

↓ 平均化

\*farit

↓ i-ウムラウト

feret(h)

<sup>9</sup> stonda (stehen)と j-現在形を持つものは除外して考えている。古英語では、a のみに統一されている。語根音節の母音が e に統一されたものと直説法 2・3 人称単数形以外 a に統一されたものが併存している場合、多く見られるのは前者である。Bremmer Jr.は、grewa の別形として grava をあげているが、Hofmann/Popkema (2008)には、grava という形はのっていない。

<sup>10</sup> Bremmer Jr.は、直説法 2・3 人称単数形以外、語根音節の母音を a に統一した動詞につき、この a がどこから来たのか述べていない。また i-ウムラウトによる e が直説法 2・3 人称単数形以外に広がったとすると、i-ウムラウトを受ける前、母音は a だったことになるが、この a についても同様である。更に Bremmer Jr. (2009: 30)では、古フリジア語では後舌母音が続いても æ が a に引き戻されないことの例として drega があげられており、説明が矛盾している (上記参照)。

↓ 平均化  
feret(h), fart(h)

強変化動詞第 6 種と、第 7 種で現在語幹が -alK- または -anK- という形のもの、過去分詞の語幹の母音が a であったり、e であったり、あるいは両者が併存していたりするが<sup>11</sup>、これには接尾辞の母音のアブラウト (-ana-/-ina- < -ena-) が関わっていると考えられる。ここで問題となるのが、\*ana は古フリジア語では a になるはずで、-en にはならないということと、-en の前であっても a という母音が見れるということである。これについては、古英語に見られるのと同じような過程を古フリジア語も経ているためと考えられる。古英語では、アクセントの無い germ. a は、n が直後に続いている時、もしこの n が同一音節に属しているならば a のまま保持されたが、n が同一音節に属していない場合には æ になった。従って、\*ana は無語尾の時は \*-an、語尾がある時は \*-æn- となり<sup>12</sup>、それに伴い語根母音にも違いが生じ、\*-an の前では a、\*-æn- の前では æ となった。後に平均化が起こり、\*-a\_en と \*-æ\_æn- の混交形態である -a\_en (< \*-æn) が強変化動詞第 6 種の過去分詞の形態として一般化した<sup>13</sup>。恐らく、これと同様のことが古フリジア語においても起こったのであろう。

Bremmer Jr. (2009: 76) は、強変化動詞第 6 種の過去分詞の語根音節における e を、i-ウムラウトによるものとしている<sup>14</sup>。これは強変化動詞第 6 種（及び第 7 種の一部）の過去分詞の語根母音が一旦 a に統一されたということを前提にしているが、それを示す証拠はなく、またそのような中間段階を仮定しなければならない理由もない<sup>15</sup>。接尾辞が \*-ina- の時、語根音節は i-ウムラウトが起こる前から e である。また上述のように、\*-en- (< \*-æn-) の前でも germ. a は e になるので、もし \*-e\_en- (< \*-æn-) という形も残ったのだとしたら、ここからも語根母音が e の過去分詞は導き出せる<sup>16</sup>。

<sup>11</sup> *bonna* (*bannen*) の過去分詞 *bonnen* は除外して考えている。

<sup>12</sup> Brunner (<sup>3</sup>1965: 31-32) 及び Campbell (2003 [<sup>3</sup>1968]: 141) を参照のこと。最も古い時期のテキストにおいては、まだ -æn という形の接尾辞を見ることができる。Brunner (<sup>3</sup>1965: 281) を参照のこと。

<sup>13</sup> 語根音節の母音が æ の過去分詞も残されている。Brunner (<sup>3</sup>1965: 283, 290) を参照のこと。なお Brunner (<sup>3</sup>1965: 283) は、過去分詞の語根音節における a は、ここであげた過程と並んで、現在語幹における a が入り込んだ可能性もあげている。

<sup>14</sup> Bremmer Jr. (2009) は強変化動詞第 7 種に関する記述の中では過去分詞における a と e の揺れについて言及していないが、第 6 種と同様に考えているものと思われる。

<sup>15</sup> またそもそも Bremmer Jr. のこの考え方は、現在語幹の a の場合と同じ問題を含んでいる。註 10 を参照のこと。

<sup>16</sup> 語根音節の母音が e で語幹末子音に口蓋化が起こっている場合には、接尾辞は明らかに \*-in- である。語根音節の母音が a で語幹末子音が口蓋化を示している形態は、\*-e\_en (< \*-in) と -a\_en (< \*-æn) の混交形態である。

## 参考文献

- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller <sup>11</sup>1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.
- Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amsterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl <sup>3</sup>1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.
- Campbell, Alistair 2003 [<sup>3</sup>1968]: Old English grammar, Oxford University Press.
- Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.
- Gallée, Johan Hendrik <sup>3</sup>1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.
- Helten, Willem Lodewijk van 1890: Altostfriesische Grammatik, Leeuwarden.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand <sup>3</sup>1974: Altenglisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
- Krahe, Hans <sup>7</sup>1969: Germanische Sprachwissenschaft I. Bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- <sup>7</sup>1969: Germanische Sprachwissenschaft II. Bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Nielsen, Hans F. 1985: Old English and the continental Germanic languages, a survey of morphological and phonological interrelations (=Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft Bd.33), second, revised edition, Innsbruck.
- Ringe, Don and Ann Taylor 2014: The development of Old English (=A linguistic history of English, volume II), Oxford University Press.
- Sehr, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.
- Wright, Joseph / and Elizabeth Mary Wright, 1984 [1925]: Old English grammar, third edition, Oxford University Press.